

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼稚園の教育

主 幹

堀 七 藏

第 二 十 五 卷 一 月 號 第 一 號

幼稚園細目……………馬場定一

御 挨拶……………倉橋惣三

動作遊戯「雨だればつりさん」……………土川五郎

私の子供の字を覺えた話……………山形 寛

小兒衛生「子供の姿勢に注意なさい」……………岡田道一

大正十三年最終の保育誌……………頼原美代

長編小説「兼ちゃん」……………岡田美津

茂木由子先生作歌
 萩原英一先生作曲
 土川五郎先生振付

四六倍判箱入装幀頗る美本
 正 價 金 三 圓 五 十 錢 送 料 十 七 錢

律動をささなごのうた 遊戯

目 次

お 日 様
 ビ ア ク
 カ ケ ク
 カ ケ ク
 風 ケ ツ コ
 コ ケ ツ コ

アビノ伴奏付

茂木先生の歌に萩原先生の曲、遊戯界の第一人者たる土川先生の振付と、三先生の御盡力で今迄に無い理想的遊戯教本が出来ました、各々多數の寫眞版を入れて表情の變化を理解し易く巧みに現して有ります。

發 兌

東京上野公園寛永寺坂下 上根岸八十八番
 振替東京四六一一番 電下三〇四七番

教 文 書 院



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長

東京女子高等師範學校校長

茨木清次郎

主幹

東京女子高等師範學校教授

堀七藏

贊助員

東京女子高師教授

嚴谷秀雄

東洋大學教授

棚橋源太郎

東京帝大醫科講師

乙竹岩造

東京女子師範學校校長

高島平三郎

東京高師教授

醫博 太田孝之

東京女子高師囑託

龍山義亮

慶應大學教授

文博 大瀨甚太郎

帝國教育會理事

土川五郎

東洋幼稚園長

醫博 唐澤光德

松住高等學校長

野口援太郎

早蕨幼稚園長

岸邊福雄

京都帝大教授

乘杉嘉壽

帝國教育會會長

久留島武彦

東京女子高師教授

文博 野上俊夫

東京高師教授

文博 澤柳政太郎

東京帝大教授

醫博 倉橋惣三

東京女子高師教授

文博 下田次郎

東京女子高師校長

文博 松本亦太郎

東京女子高師教授

文士 菅原教造

奈瓦女子高師校長

文博 榎山榮次

醫、文博 富士川游

醫博 三田谷啓

東京市學務課長

藤井利譽

奈瓦女高師附屬幼稚園主事

湯原正雄

東京女子高師講師

藤五代策

東京高等學校長

安井哲子

長崎縣師範學校長

福士末之助

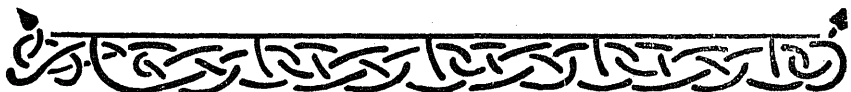
東京帝大教授

文博 吉田熊次

文博 谷本富

日本女子大學長

安井哲子

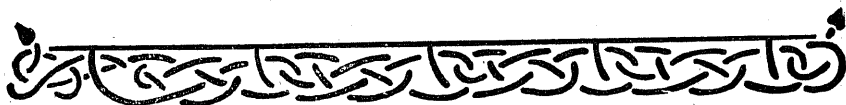




號一第 育教の兒幼 卷五十二第

次 目

幼稚園細目……………	馬場定一……………二
御 換 拶……………	倉橋惣三……………三
遊戯 雨ざればつつりさん……………	土川五郎……………三
動作……………	山 形 寛……………五
私の子供の字を覺えた話……………	岡 田 道 一……………六
小兒衛生「子供の姿勢に注意なさい」……………	岡 田 道 一……………六
大正十三年最終の保育誌……………	穎 原 美 代……………二〇
長編『兼ちゃん』……………	岡 田 美 津……………二四



日本體育會體操學校講師
大阪府金蘭女學校校長
童謡新舞踊研究會主幹

久保富次郎先生著

菊判總クロース製箱入美本
舶來上質アートペーパー
圖解寫真六十餘圖挿入

各大家 合作 童謡 新遊戯

正價金二圓十五錢
書留送料金五十錢

目次

みづ汽車	夏	お月さん	おぼせんぼ	虹の橋	お山の大将	月夜の鐘	鈴蘭	お星様	子守唄
雜誌明日の教育	三澤露	光八郎	西條長八	北原白太	野尻景雨	池田龍太	西條長八	西條長八	黒澤隆
作	作	作	作	作	作	作	作	作	作
曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲

付奏伴ノアビ

我國古來の舞踊と新來のダンスの長所を取入れ兒童に適應する様に創案した表情遊戯で學校教材として最も理想的のもの、殊に上品に優雅に謡の示す通り表現し無意味な手振、餘計な表情を入れず、曲の表現に對しては最も注意せる遊戯として無比の教材書であります。

發兌

東京上野公園寛永寺坂下
振替東京四六一一番電下三〇四七番

上根岸八八
教文書院

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹
堀 七 藏



第 一 號

1925

第 二 十 五 卷

保育細目

馬場 定 一

お噺の本

子供に聞かせるお噺のいゝ本が今日は澤山にある。數年來此方傳説、仙人噺、神話等の如きものゝ興味が復活して來た様で、澤山の出版者が今尙之等の好ましきよく編纂されたものを出版して居るから、假令保母が自分にこんな本を持つて居ない場合でも、其の優秀なものゝ二三はどんな地方の圖書館にでも備へ付けられて居る筈である。色々な型のお噺を戴せて居る本は普通圖書館にもあるし、又保母が買ふにした所で買ひ得る範圍のものである。

お噺の時間は幼稚園の子供にとつては最も楽しい時間であり又さうなければならぬのであつて、保母が子供の心に觸れる時であり、子供の想像を熨きつける時であり、又有益な暗示を與へ善い行に導く好機會である。更にかの仙人噺の、子供を惹きつける様な事件は子供に人生の理想を暗示すべき機會である。「昔々或處に」は何處の幼稚園の子供にも、その目に新しい光を與へる魔力を持つた言葉であるし、又そうならなければならぬのである。理想的なお噺は實に子供にとつては精神的にも道徳的にも強壯劑である。唯此の上は吾々はみんな自分の判斷と力とを以て之を如何に利用すべきかを知らん事を希ふものである。

故に説話に關する参考書及幼稚園で使用のに適當と認められるお断の簡単な目錄を擧げておく。ミス、ブライアント Miss Bryant 及びミス、リンマン Miss Lyman の兩氏は何れも説話者に有益な目錄を發表して居る。

参 考 書

Myths and Myth Makers—Fiske.

Curious Myths of the Middle ages—Baring—Gould.

Origin and Meaning of Fairy—Tales—Bunce.

Classic Myths—Gayley.

The Moral Instruction of Children—Adler.

Stories to Tell to Children—Bryant.

How to Tell Stories to Children—Bryant.

Stories to Tell the Littlest Oes—Bryfant.

Story—Telling, What to Tell and How to Tell it—Lyman.

附 録

The Three Bears, the three Little Pigs, The Mouse That Lost its Tail, English Fairy—Tales—J. a. o. s.

The Little Red Hen, For the Children's hour—Bailey and Lewis.

The Frog Prince, Diamonds and Tools—Grimm brothers.

Thumbling, Boston Collection.

Little Half Chick, The Ginger—Bread Man, For the Children's Hour—Bailey and Lewis.

Hausel and Gretel, German Popular Stories (This is not the traditional Hausel and Gretel, but an adaptation of Grimm's The Brother and Sister.)

The Proud Weather Vane, the Lion and the Mouse. Dora's Little Girl of the Lighthouse, Boston collection.

The Mother Stork, Kindergarten Review, September 1897.

The Bird's Nest, Kindergarten Review, April 1899.

Rugbying, Best Stories to Tell to Children—Bryant.

The Crane Express, the Lost chicken, the thrifty Squirrel's (adapted), In the Children's World—Poulsson.

The Little Green worm, cat Tails and Other Tales—Howlston.

Stories of Brave Dogs, It. Nicholas Magazine.

Tommy Tuckers Bun, the Wee Pumpkin, stories of Mother Goos's Village—Bingham.

Yeeny—Ueeny. English Fairy Taled—Jacobs.

六、保姆と小學校教師

子供は四—五歳で幼稚園に這入り六歳で小學校の第一學年に進むものであるが、非常に稠密した町などでは、五歳で幼稚園に這入つたものが、園は狭し、小さい子は幼稚園に這入りたがるので室をあげる必要上五歳半で學校に追ひやられる場合もあるのである。

幼稚園は何をするのか

先づ第一の場合を考へて見ると幼児が幼稚園に這入つて其の躰から——かりにこの躰が承認せられた型のものとして——受けた所のものは何であるかといふと、社會生活の樂しさに自分を一層適應させるべき生活上の或る態度であつて、好ましき習慣の端緒、即ち禮儀、親切、思索、清潔、秩序、從順等が樹立せられ、そして未熟な子供の考相應な人生の理想が明かにされた事である。幼稚園に這入つてから一年乃至其以上も経てば、入園當時に較べると幾分か自制も出來、自信も出來たし、又其語彙は餘程増え、表現は豊富となり、自分の生活して居る世界や事物の關係に就ての考も聞く獲て居るのであつて、小學校へ持つて這入るべき澤山な仕入を得たわけである。かくなると小學校が待つて居る仕事には熱心で——其誘因は恐らく保姆が子供の前に置いて來たもので——幼稚園の子供らしい事柄には見向きもしないで、今は唯讀まんとし書かんとして居るのである。けれども子供としての一般の特徴に關してはほんの僅か許變化して居るに過ぎないので入園當時と同様に今も尙快活であり、自働的であり、活動性にみち、多く感情の支配を受け、其の生活は同情によりて制時せられ、注意は集中力がやゝ發達して來たとは言ふものゝ依然微弱で殆んど全く無意識的であると云つて差支無い。

次に第二の場合はどうであるかといふと、幼稚園に這入つた子供は其の生活に由つて極僅かしか影響を受けて居ない。善良な習慣の樹立とか、自制、自信等の要素の發達とか云ふけれども、それは僅か五ヶ月足らずの期間では餘り短か過ぎるのである。子供が保姆の手に這入つてから、やつとこんな仕事の緒についたばかりなのに、それなり直ぐ小學校に追ひやられて仕舞ふので外國人の子供なら、言葉を改めたといふのが恐らく幼稚園で獲た最も著しいものだらう。併し一般に保姆の方面から見れば、各方面の改善なり發達は認める事が出來るけれども、之を受け繼ぐ所の小學校の先生には、其の根ざしが充分に深く無い爲めに殆んど認められ無い。不幸にして今日の幼稚園に這入つて、現在の右の如き保育を——保姆はこの方法には反對意見は持つて居るのだけでも、今保姆の手では之を變ずる事の出來ない——受けて居る子供は、其の家庭の環境に於て適當なそして幼児保育に必要な條件を缺いて居るのであつて、従つて特に幼稚園の全課程を必

要とするものである。

保母と小學校教師との共通の根據

此に子供の躰と云ふ點に關する限に於ては、小學校の先生についての問題は保母についての問題と毫も異なる處は無いわけであつて、其の取扱ふ子供に變りは無く、唯その程度に於て異なるのみである。故に小學校教師が自分の仕事を讀書算の三つのものでなくそれ以上の或るものと見るならば、言ひ換へれば、躰を以てその仕事の全部と見るならば、現在自分の管理の下に來て居る子供が今日まで如何なる感化の下に慣されて來たものであるかに尠からぬ關係を有する事は保母と同様である。

漸次事實の認めらるゝ事

右の様な次第であるから、以前に學務當局が「小學校と幼稚園との間の溝に橋渡しすべき」移り替のクラスを設置する事の得策を論じて居たのも決して突飛な事では無い。然るに其の後のこの過渡的クラスに對する興味なり其の必要なりが聞えなくなつたのは何に基因するのであるか、之には二つの理由があると思ふ。この第一の理由は、今日幼稚園は既に教育上變態のものとは見られないで、教育的建設の礎と認めらるゝに至つた事であつて、その二は、一年生に這入つて來る子供に特有の訓練を施すべき理想が根本的に變化して來て従前の經驗とは全く關係の無い空氣の中に之等の子供を置かない様になつて來たからである。今日の小學校の中には猶澤山の舊式の型のものもあるけれ共、中には幼稚園と同様幼學年に於て相當に自由な空氣が與へられて居るものもあるのである。幼稚園作業の仲間入の主なるものは、子供の注意を惹き附ける所の手工、お噺、遊戯及對話劇の如きものであつて、場合に由つては、固定した机腰掛が動かされて、幼稚園の様に

自由なよく働く小さい人々の巢箱の如き感あらしむるものがある。或る師範學校の如きは保母養成科は保母及小學校教員養成科に改められ、小學校教育、幼稚園保育何れにも適した教育を授ける様になつて居る。之は全く幼稚園と小學校との兩方が其の仕事と目的とに於て一致せる事を評價せるものに外ならぬのである。

小學校に於て教養せらるゝ各個人は、幼稚園に於て保育せらるゝものと別個の生物では無いといふ事を前提とし、又其の適用せらるゝ手段は幼稚園の仕事から分離せらる可き性質のもので無く、寧ろ其の擴張であり、之より發達すべきものなる事及其の理想とし目的とする所は等しく兒童の幸福と發育とにある事を前提として見る時は、保母と教師との間には親密なる兄弟の如き關係の存すべきものなる事は火を賭るより明かな事である。けれどもこの事が以前には決して當然の事では無くして寧ろ例外であつた事は正直に容れなければならぬ所である。然るに其が今日幸福にも漸次普通の事として認められる様になりつゝあるといふ事は、幸福なる時代の將に來らんとする心地よき前兆の一に計へなければならぬ。

その遅延の理由

併し乍ら、何故に此の非常に囑望せられて居る保母と教師との協力が、今日までかくも遅延されたのであらうか。何故そこに困難が横はつて居るのであらうか。この困難の根源こそは幼稚園保育及小學校教育の當事者の態度に存するものなる事は疑ふ餘地の無い所である。從來の小學校には、機械的慣例を強情に固執し、明かに幼稚園に對して敬意を持つて居た教師の一階級があつたのである。この人達は頑固にして自ら傲然と構へて近よるべからざるものであつたが、幸にもかゝる手輩は漸次教育界から其の影を潛めつゝあるのである。又中には之に反して、快活にして理解あり、高き理想によつて動かされ、自分の取扱ふ子供をよくする事に就ては、其の兄弟たる保母に劣らぬ熱心を以て滿されたるものもある。其の多くは自分の業務に對する教養も準備も保母と同様に之を受け、或るものは恐らく保母以上に之を受けて居るものも

ある。彼等はいつでも喜んで保母と協力すべき心持で居り、又子供に對する仕事を更に一層有效ならしむべき計畫は如何なるものでも受け入るべき考を持つて居るのである。所が此の心持で或る所まで進んで行つて見ると、如何せん案外、保母の無關心な態度——小學校の要求や仕事に對して無關心な態度に遭遇する事の多きに驚くのである。兩者の間に立派な協力の行はれて居る好例も澤山にあるが、又之に反して協力は愚、兩者の間に何等興味の無い場合も尠く無いのである。

教師の中には、自分に負はせられた義務を果す上に、幼稚園に於ける教養の力より以上立派に之を果さんがために、自分の仕事に對して熱心と熱狂とを以て満たされ、其の仕事の興味の爲にはいつでも自己と時とを犠牲にする覺悟を持つて居り、自分自身の生長のために熱心な一群のある事を知らなかつた事は事實である。多くの都市に於ける幼稚園聯合はかゝる婦人團體を勵ます所の専門的精神たる事を證明するものである。かう云ふ婦人達は講演を聞く爲めに進んで自分の金を使ひ、又意見を交換し、問題を研究するためには喜んで會合に出席するのである。かくの如く激勵せられて居る婦人の團體に接觸して行く事は向上の念を起さしめその精神を活動せしむるものである。すべてかくの如く立派であるに拘はらず、やゝもすれば幼稚園の保母として孤立した種類のものとなり、自分にすぐ接して居る隣人の興味を排除して、自分丈の特殊の興味の中に没頭してしまふ傾向がありはせぬかと心配するのである。さうなると、小學校の先生の要求に對しては無關心となり、更に場合に由つては——私としてはこれを認める事を好まないものであるが——自分はその兄弟たる小學校の先生とは其の質に於て根本から異つて居るものであるかの如き考を持つて、自分の優越について傲慢な感を抱くに於るものでもある。最も公平な判斷を持つてするならば、幼稚園にも小學校にも、立派に教育を受けた、役に立つ婦人が居るのだといふ事は誰でも承認しなければならぬと同時に又不幸にも其の反對即ち、ちつとも役に立たない、貧弱な、淺薄な婦人も亦この兩階級に見出されるものであるといふ事を認めなければならぬ。自分自ら勝れて居るものとして已惚れる事は慥かに賢い事では無く又さうあるべき事で無いので、それはそうしなくとも、その人の行と仕事とが、其の人の勝

れて居ると否とを説明して呉れるものである。

相互補助の利益

保母は其の兄弟たる小學校の先生と親密に相互助け合ふ結果獲る所は澤山あつても決して損失を受ける様な事は無い筈である。保母が子供と共に一年乃至二年の歳月を費す事は要するに子供がその缺陷に打克つて不良な習慣を除いて其の代りに良習慣を植付けん事に力むるため、言ひ換へれば、いつか立派な品性に發達して行く可き種子を蒔く爲めである。然るにかゝる子供を、保母の手から離して而も唯單に偶然の知己に過ぎない、そして子供の躰に關して果して如何なる理想を持つて居るかも知ら無い、且つ恐らくは子供のあらゆる方面の發達に關して更に興味を持つて居まいと思つて居る學校の先生に托するのだと考へる事は心のすままない事に違無い。又自分の費した時間なり勞力なりが終に全く徒勞に歸して終ふのだと考へる事も恐ろしい事である。又子供の喜びや悲しみは保母にとつては試に親しみのものとなつて來て居るのであり、其の誠に小さないぢらしい希望がどれ程か保母の心を刺戟して來たものであり、又その子供が爲には少しでも良い行良い生活の方へと其の歩みを辿つて來たものであるから、これ等の子供は保母の心には實になつかしく慕はしいものとなつて居るのである。小學校の先生及び其の仕事は保母にとつては殆んど知らない所でありそして小學校そのものは、自分のすぐお隣であるに拘はらず全く未知の邦である。

之に反して、小學校の先生と兄弟の様な親密な關係を保つて生活して來た保母ならば、これまで非常な忍耐と倦むことなき氣力とを持つて努力して來た自分の仕事の結果がどうなつて行くかに就ては少しも心配する必要は無く、又は少くとも殆んど氣に懸らない位である。そして兩者の交渉は相互の了解を得る事が出來、相互の助となつて行くのである。之に由つて保母は、小學校の先生は幼稚園に這入らなかつた子供に較べると、幼稚園保育を受けた子供は正に優つて居ること

を發見して居るのだといふ事を知る事が出来る許で無く、先生の眼にうつゝ來た弊上の缺點を知つて自分の今後の參考にして行く事が出来るわけである。又其の先生の仕事なり理想なりをも幾分かわかる様になり、自分に反對の意見も見出し、従つて自分自ら學校を訪ねて、學校で行はれて居る實際を知る機會をもとめて、自分自身の心靈の擴大を圖る事が出来るのである。

又學校の先生の方では、幼稚園の躰の理想や目的を一層よく知る様になつて來るのであつて、今に自分の教室に這入つて來る子供に關して其の大體を知り、保姆が子供の爲に毎日試みて來た總て、及び子供の爲に望み又恐れて居た總てを知り、かくして保姆の築いた基礎の上に建設すべき一層よき準備をする事が出來、そして、機を見て、兩者は相互に相談をする事も出来るのである。かくなれば保姆は小學校は自分の自由になつて、今まで非常に努力し最も深い同情を以て働いて來た小さい子供は最早や其の手から失はれる事は無く、今尙ほ其の兄弟たる小學校の先生と相共に、未だ蕾である子供の日に日に發達して行く其の生活を眺める事が出来るのである。幼稚園保育を直ちに價値あらしめ、子供を教へる事をし、て無駄ならしめないのは正にこゝに存するのである。

故に私は、既に仕事に従事して居る保姆も、乃至は又これから仕事に就かんとする保姆も、小學校の先生との間に心からの關係聯絡を立てる様に企てる事は焦眉の急務であると思ふのである。それには先づ自分自身で小學校殊に幼學年の仕事及其の要求に親しむ様にすがいと思ふ。自分の仕事の理想や方針を學校の先生に了解せられる様にするのが好い。又學校の先生を幼稚園の母の會に招き、學校の方で要求するなら學校の母姉會の援助もして、一年もたてば年の終りに大なる父の會に連繋をつける様になれば此上ない事である。それから雨風の日などで子供の出席の少い時などには、近頃諸所でよくやつて居る様に、來て居る子供をつれて一年生を訪ねてやると好い。それは朝の體操の時間でも、又朝の遊戲に一緒に這入つてやつてもかまはない。そうすれば、自分の仕事に對して學校の先生の興味と同情とを引き入れる事が出来る

ばかりでなく、子供にも喜びを與へ、そして、兩方を結び付ける鎖を強くして行く事に助となるものである。要するに、學校の先生と自分自身との間に有益にして且つ生きた交渉を發達させる機會を注意深く見て居れば好いのである。

この事はいつでも容易く出来るといふわけにはいかぬかも知れ無い。場合に由つては機械的の型を以て投げつけられる様な不幸に遭遇したり、全く無關心であつたり、又は敵意をさへ持たれる事があるかも知れない。學校の先生の中には幼稚園の如何なる興味にも説服され得ない人や、幼稚園の理想を納得する事の出来ない人もあるが、これは極僅少である。中途までしか行かれない場合が随分度々あるだらうが、遂には協力を喜んでくれる様になるだらう、いつか先生との友情を得べき日あるを信じて其の機會をつかまへる事に努めよ、忍耐と氣轉と同情とを以て。但し同情は心より湧き出づるものたるべく、容易に見破られて恨みを買ふ様な虚裝ではいけない事を心に銘じておくことが肝要である。

かゝる關係の如何に相互に助けとなり又利益となるかは之れに對して十分に經驗をした人のみの諒解し得る所である。これは保姆の仕事を擴大し、實行の上には刺戟となり矯正となり、子供に對しては發達と幸福のために最も確實に働く様に反應するものであると信じよ。かゝる訓練を受けた多くの保姆を以て仕事をすべき實現の日は遠くあるまい。親切なる運命の神よ、かゝる都合よき日を一日も早く來らしめよ。(完)

謹賀新年

日本幼稚園協會
幼児の教育編輯部

御 挨拶

倉 橋 惣 三

本會主幹を辭するに當つて、長く會員諸君から寄せられた御好意に對し、更めて深き感謝の意を表します。事務の關係上、主幹は辭しましても、本會の一員としては、今後も機會ある毎に誌上で諸君にお目にかゝることと思ひます。殊に、幼兒教育に對する興味と研究とに於ては、從來通り、勿論何等變りないのでありまして、いつまでも諸君の尾に附して、我國幼稚園界のために微力を竭し度いと思つて居ます。此點は、斯界同志の方々に對して、特に御諒承を願つて置きます。

尙ほ、東京女子高等師範學校附屬幼稚園主事として、また、本會主幹として、同僚堀教授を迎えましたことは、我國幼稚園界のために、力強き一人者を得た譯で、此上ない幸と思ひます。今將さに益々多事多望ならんとする斯教育界のために、誠に喜びにたえないのであります。諸君と共に、同君に期待するところ實に多いものであります。

雨だれぼつつりさん

遊動
戯作
雨だれぼつつりさん

動作遊戯雨だれぼつつりさん

變ホ調 $\frac{2}{4}$ (やさしく)

$\frac{5}{\text{ノ}} \frac{1}{\text{キ}} \frac{1}{\text{バ}} \frac{2}{\text{ニ}} \mid \frac{3}{\text{ナ}} \frac{2}{\text{ラ}} \frac{1}{\text{ン}} \frac{5}{\text{ダ}} \mid \frac{6}{\text{ア}} \frac{1}{\text{マ}} \frac{1}{\text{ダ}} \frac{7}{\text{レ}} \frac{4}{\text{ー}} \mid \frac{5}{\text{ポ}} \frac{5}{\text{ツ}} \frac{6}{\text{ツ}} \frac{5}{\text{リ}} \frac{0}{\text{サ}} \mid$

$\frac{5}{\text{ポ}} \frac{3}{\text{ツ}} \frac{2}{\text{リ}} \frac{5}{\text{ポ}} \frac{3}{\text{ツ}} \frac{2}{\text{リ}} \mid \frac{5}{\text{ポ}} \frac{5}{\text{ツ}} \frac{6}{\text{ツ}} \frac{5}{\text{リ}} \mid \frac{5}{\text{ヒ}} \frac{3}{\text{ョ}} \frac{2}{\text{ー}} \frac{5}{\text{シ}} \frac{5}{\text{ヲ}} \frac{6}{\text{ソ}} \frac{6}{\text{ロ}} \frac{6}{\text{ヘ}} \frac{6}{\text{テ}} \mid$

$\frac{5}{\text{ポ}} \frac{3}{\text{ツ}} \frac{2}{\text{ツ}} \frac{1}{\text{リ}} \frac{0}{\text{コ}} \parallel$

○歌 曲

1. 軒端にならんだ

雨だれぼつつりさん

ぼつつり ぼつつり ぼつつり

拍子をそろへて ぼつつりこ。

2. のきはの兵隊さんは

仲よしぼつつりさん

ぼつつり ぼつつり ぼつつり

拍子をあはせて ぼつつりこ。

いづみ
芝祐泰
土川五
十郎
作歌
作曲

○動作

一 のきばに……………両手を前に、少し上方にならべて出

し、掌を下にしそれを左方へ平らに

送る。

ならんだ……………同じく右方へ

あまだれ……………両手をまとめて體前上方にあげ更に

両手を山形に左右に開く(此の時兩

指先を動かしつつ)

ぼつつりさん……………右手を下に左手を上足踏二回

ぼつつり……………體前にて兩手を打下ろし(拍手)左

足あとに蹲踞し下を見る

ぼつつり……………下より上へ兩手を打ち上げ(拍手)

立ち兩脇を曲げ前を立て掌を前に

向け上を見る。

ぼつつり……………拍子蹲踞前の如くす

こ……………拍子して立ち前の如くす

ひようしを……………左側にて拍手一回

二 のきばの

兵隊さんは

……………第一の「のきばにならんだ」と同じ

仲よし……………兩手を頭上に左右より掌を合す

ぼつつりさん……………そのまま體前下方に下ろし兩手をぶ

らぶらに下ぐ

ぼつつり

ぼつつり

ぼつつりこ

ひようしを

あはせて

ぼつつりこ

……………第一に同じ

そろへて……………右側にて拍手一回

ぼつつりこ……………體前にて右手下左手下、次に左手下

右手上に足踏二回

私の子供の字を覺えた話

東京女高師訓導 山 形 寛

私の長女は滿六歳と七ヶ月になる。この四月には小學校へ入學する筈になつて居るが、この子供が何時とはなしに文字一つづゝ覺えて行つて今では片假名は全部讀むことが出來、平假名は約半分を讀み、漢字は十字位が讀めるやうになり、片假名は殆ど全部書けるやうになつてゐる。その文字に對する知識が漸次出來かけて來た經過の概要を書いて見やうと思ふ。然し私は元來文字に對する知識も少く、又それに對する興味もあまり持つて居ないのであるから、經過に對する觀察も極めて杜撰なものであらうけれども、それを詳しく書くことがこの稿を書いた目的ではなくこの事實によつて種々考へさせられたことがあつたから茲に之を書いたのである。

私の子供の字を覺えた話

私の學校では初めて尋常一年が入學して來た時には、各兒童の文字に對する知識の程度、數觀念發達の程度其他造形的表現力の發達程度等を調査するのであるが、その調査の結果大多數の兒童は多少の差こそあれ何れも若干の文字を讀み得又書き得るものであるが、それ等文字を覺えた兒童が、何によつて文字を覺えたかを調査して見た所が、一番多いのは積木の立方體又は板に片假名と平假名とを書いてあるものに就て一つづゝ覺えて行つたと云ふものが多かつた。この事實を見た私は三年程も前に何かのついでに一寸角位の平板の一方には片假名を一方には平假名を燒繪で書き字によつて赤や黄や青や緑のエナメルで塗つてあるものを買つて來て與へて居つた。そして私はそんなものを與

へたことも忘れて居り、又別に文字を教へやうとか覚えさせやうとか考へたことも無く、又他の家族もさう云ふことに對して積極的な何等のこともなまなかつたのである。それは私はせめて幼児期だけ位は子供が自然に發達するまゝにまかせて、あまり人爲的に細工を施すことに賛成しなかつたからである。然し只彼の環境をなるべく豊富にするにとだけは多少考へて居たに過ぎなかつたのである。

◇

今年の七月の終りから八月の初めにかけて、私は講習に出かけて二週間ばかり留守にした。その旅行に出かける迄は、子供は文字に就て何等の興味も無く又知識も無かつたのであるが、旅行から歸つて間もない頃の或日の夕食後に例の文字の書いてある板を出して來て。何やら云ひ乍ら一心に併べながら何か考へ考へして居つた。そしてその併べたのを見たら、ヤマカタトシヨとしてあつたから、私は「とし子さんは字を知つてゐるの」と聞いたたら「知つてゐるよ」と答へ「それは何と云ふの」と聞いたたら、その文字の如く讀み得たのである。そして「まだ他にも知つてゐるのがあ

るの」と聞いたたら、他にもまだ十二三の文字を拾ひ出したのである。そしてその中には明瞭に覺えてゐるものもあり、まだ多少あやふやのもあつた。そこで私は誰に習つたかを聞いて見たが、それを誰れからと明瞭にはなし得なかつたけれども、近所の小學校の一二年に行つて居る子供が二三人と女學校の一年に行つて居る子とが毎日遊びに來て居り何かの遊戯の材料にその積木を出して來た時に、讀んで聞かせたり教へたりしたものらしかつた。それ以來文字を覺えることに興味を持つて來て、私が新聞でも讀んでゐる時に、それを見て廣告等に出て居る文字の中から、自分の知つて居る文字を見つけ出せば得意になつてそれを讀んだり又積木を出して來ては、お友達の名前をならべたり、品物の名をならべたりして、其間に解らない所は一つづゝ聞いて行つて、何時とはなしに、八月の終頃までには、ほど片假名を覺えてしまつた。この間に於ても彼の周圍は決して積極的には教へやうとしなかつたし、彼も亦そのために決して負擔を感じはしなかつたと思ふ。かけつこをしたり、土いぢりをしたり、でたための樂書をするのと同じ心持

で覺えて行つたものである。彼自身にとつては、遊戯をするのと字を覺えるのとは同じ心持ちであつたことと思ふ。否字を覺えることも遊戯の一種に過ぎなかつたのである。

◇

この積木の板を併べるとは、九月の終頃まで續いたが、それから後は板を出すことをしないで、これ迄繪を見て楽しんで、それを切り抜いたりするために與へて置いた、コドモノクニ、ミソラ、コドモアサヒ等の片側名で書いてある部分を読むことを初めた。然し讀むと云つても只一字づゝを拾ひ讀みするだけで、その意味を取ることには出来なく。又取らうとしなかつた。只一字づゝをきれぐれに讀み得ればそれで満足して居つたのである。然し雜誌を讀むやうになれば濁音や半濁音の文字が多く出て来るから、自然それ等に就ても注意する様になり、又何時とはなしに覺えて行つた。かう云ふことを繰越しやつて居る中に、幾分文章としての意味のとれる所も出来てきて、送り字や、拗音仄音等の読み方やつてふく（蝶々）やうに（様に）等の

私の子供の字を覺えた話

如き文字通りに發音しないものゝ讀み方に就てもいくらかづゝ讀めるやうになつて來、最近に於ては若干の漢字と平假名とを讀み得るやうになつて來た。而してこゝ迄來るのにもやはり遊戯の一種としてそれを覺えて行つたことは先にも述べた積木によつて覺えて行つた場合と變りないのである。

◇

私は兼てから、學習と遊戯との關係に就て、それが同じ心持ちで兒童の生活に取り入れられることが最も自然であり且つ最も力強く確實であることを信じて居つた一人で、我が附屬小學校の第三部に於てはさう云ふことも一つの研究問題となつて居つたのである。學習することは即ち遊戯することであり、遊戯することは即ち學習することでありと思ふ。云ひ換へれば小學校の低學年の兒童にあつては學習することと遊戯することとは、そこに何等の差別なしに、親しみ易い氣持ちを以て彼等の生活を形造つて行きたいと思ふ。學習と云ふことを特別な、勉強するんだ！と云つたやうな何か張りつめた氣持ちですることは、大きく

なつてからならば兎も角、小さい兒童にとつては、一概に有效なる方法だとは云へないのである。

以上のやうな意味に於て、私は日々兒童を導いて行かうとして苦心をして居つたのであるが、學校教育に於ては、學級組織の上から、及び教科課程の上から、どうもそれが工合よく行かなかつたのであるが、家庭に於て私の長女が字を覺えて行つたのを見た時、それが最も自然的に行はれ

て居ることを知り、私は教授方法改善の上に大なる暗示を得たやうな氣がしたのである。そして又この事によつて、所謂早教育なるものゝ意義やその可否等に就ても考へさせられたのである。然し私は茲でそれを述べやうとは思はぬ只かう云ふ事から色々な暗示を受けたと云ふことを表明してこの稿を結ぼうと思ふ。

小兒衛生

「子供の姿勢に注意なさい」

醫學士 岡田道一

子供の姿勢といふことは極く大事なことです、殊にそれは幼兒の中から氣をつけねばならないことであります。

子供をお湯に入れた際又は裸にして空氣浴をさせる場合に子供の身體を時々綿密に検査することをお勧めいたします。

す、差當り姿勢や運動や緊張してゐるかどうか、或は弛んでゐるか注意をなさい。習慣に適しまして子供の立派な姿勢や運動の生々したこと又持續に耐ゆる事とは恐らく體重の重いといふことよりも健康の一大確實な徴候であります。

體重の重いといふことはさう大して望ましくないことで殊に脂肪の沈着は細胞組織内に水分の集積によつて起るので、それ故一にも二にも肥ることばかりを考へて姿勢のことに注意をせぬ親があります、それはいけません、殊に必要なのは背柱の何れかに彎曲か又は胸部脚足爪等に彎曲があります、が是等々を注意することです、多くあるのは尙僕病で詳しく申し上げますと英國性關節病に胃かされてゐます、畸形的の子供であります、之は今から餘程古い幼児の時代にありました骨の軟弱と撓易性が病的に胃されて進化したものです。此様な子供に餘り早くから力を出させたり又は終日不正位置にあるのを構はず放任して置きますと胃されてゐます骨の一部に彎曲を呈してゐます、之は時を遠へず發見して早く治療しますと全治するものです。此の彎曲が持續しますと骨は不正の方向に發育しまして硬くなり筋肉の靱帯が不正の姿勢に適合しますともう恢復させることは出来ません、ですから子供の身體發育は、幼稚園幼児又は小學校の第一年生の時から注視しまして或る部に畸形を發見しましたら直ちに醫師に診察を乞ふことです、そう

しますと時を逸することなく病氣を完全に除去することが出来ます。

背柱が後方に彎曲しますことは子供が尙夫れ丈けの力のない中に早くから起したり抱き上げたり眞直に立せたりしますと之が生じます。又枕で子供の首を全く不自然的の直立を長時間に亘りまして支持させますと缺陷が治癒されません、却つて不良の結果を醸すことがあります、若し子供が此の際氣のつかぬ間に疲れて眠り込みますと重い頭は足の前に懸る様になります、斯うなりますと一層惡結果を惹起します、少くとも此の不正な看護のために不良な姿勢が出来まして遂に再び取り返すことが出来ぬ事になるのです。

尙僕病の子供には同じ原因から背伸筋の病的弛緩のためと、背柱の最初より異常な軟弱とによりまして隆肉が成り立ちます、此の隆肉は背柱の全部に亘りまして多くは最下の胸椎と腰椎に亘り同等の弓形を呈しまして延長いたしました。

背柱彎曲の成立は周到な且つ執著的看護に依りまして前

述の缺陷を避けますれば容易に防止することが出来ます。其の外總て最初より子供は平面の基床に横へることに注意なさい、子供を抱き上げる時にも亂暴なことをして軟かい骨格を損ふ様なことをしてはいけません。子供に運動を強

いたり骨と肉の自由な働きを妨げたり、身體をあまりに緊張的に結んだりすることをさけて寧ろ自然に任して自身立ち起き、運動を始める迄母親たちは怠らずに靜かに御待になつた方が得策です。

大正十三年最終の保育誌

京 都 穎 原 美 代

私は其の最終日の當番にあたつてゐました、例年摺紙の一束を子供の休暇中に復習の意味で與へるのであつたが、本年は子供の誕生日の祝にとて皆に玩具を買つて下さいと云つて家庭からの寄附金があつたのでそれで摺紙のかはりに二三十錢位のおもちやを與へることになつて前日買調べて置いたのであつた、それをたゞ分けて歸へつたのでは興がないと思つて それを子供に渡す方法を考へました、其の結果、クリスマスと思ひうかべました、宗教的の意味でな

しに、たゞあそびとしてサンタクロスを利用しようとするのであります。

クリスマスとはどんなことか、といふ事も知らせたいと思ひついたのであります、そしてサンタクロスに主任の方に假裝して頂くことにした、尙又次のやうな話を作りました。

準備 一、クリスマスツリー。この木に玩具の番號札を附す。

一、サンタクロスの服装。赤ケツト二枚、帽子（赤紙で貼つたもの）白紙を切つたひげ、まゆ毛や口ひげ（綿）等。

一、大きな袋。（テーブル掛を利用）

實際 例の通りに會集

今日は何日になつたのですか、そう二十五日ですね、今年皆さんとあそぶのも今日ぎりですね、昨日皆さんとお約束して置きましたね、おもしろい遊びをしてお別れさせようね、「もう幾つ寝るとお正月」と毎日々々歌つてゐましたが、あと七つ寝るとお正月が來ますね、うれしうせう。

ゆうべ先生は床に就いてからも考へましたの、皆さんとお約束した通り、どうしておあそびしようかとね、あゝしように、こうしようかと考へ〜しましたの、すると私の體がつゝと軽く〜なつて空に飛んで行くぢやありませんか、飛行機のやうに音も何もありませんの風船玉のやうにフワリ〜ととんで行くのです。そら彼の高い頂きに雪が白くなつてゐる比叡山ねあの山を越してね、三井寺へ行つ

た時に廣い海があつたでせう、あの琵琶湖も越してね、三井寺のま向ふにあつた富士山のやうなお山ね、三上山彼のお山も越しましたの、そして私は何所へ行くのか自分ではわからないのですがね、東北々々とフハリ〜ととんで行くのです。すると向ふの方に燈の光が見えますの、あんなところにあんな燈が見える何所だらう、あそこへ行つて見やうと思つてゐるとス〜と其の方へいきましたの、そこはね、赤や緑や青のガラスでね高いお家でした、そしてお家の中から子供さんの唱歌の聲が聞こへますの、ハテナ何だらうと思つて窓からチョイとのぞいたんですの。そしてたらね子供さんがたくさんよつてねまん中に、白いおひげの、赤い着物を着たおぢさんがニコ〜して居られました。誰でせう？ そう〜サンタクロスのおぢさんですの、お空のどこにも玩具で一ぱいのですの、まああんなにいろ〜のおもちやがたくさんあるんだわ、ほしいな、私のすきな幼稚園の子供さんにあげ度いんだが、ほしいな、たのんで來ようか知らと思つてね入口の所へいつて戸を押して見ましたらね、ギ〜と音がして開きましたの、そして皆の

お目々が私を見ました。私はおじぎをして中には入りました、そして皆さんの仲間入をしましたのよ、種々な子供さんのお話をききました、サンタクロスのおぢいさんは云ひました。

「こゝは私の家です、私は子供が大好きでいつでも私のそばには多勢の子供がよつて來ます。そして其の子供さんは皆強いよい子供ばかりです。

クリスマスが近づいたので、其の仕度をするのに忙がしいのですよ、此頃と毎晩町へ出掛けて行くのです。大きな袋に一つばいおもちやをつめてそれをかたげて出かけますそして子供が寢靜まつたじぶんにとつとは入つていつておもちやを置いて來るのです。それが私の一番楽しい仕事なのです、今夜ももう少しすると出掛けます」つてね。

それで私は云ひました。

「私も子供が大好きですわ、私も毎日々々幼稚園へ行つて多勢の子供さんとあそんでゐるのです、皆いゝ子供さんですがね、私の仲よしの子供さんにも其のおもちやを下さいませんか」とお願いしました。

そうするとおぢいさんは考へて入らつしやいましたが、

「上げますとも、けれども私は晝間は町を歩くことがきらいです、晝間にあるくと、子供がよつてたかつておもちやをとり合ひして皆こはしてしまひますから獨でないといけ行ませんね」と云ひましたの。

どうしようか知らと考へました、そして私はおぢいさんに云ひました。

「そんならねまことにすみませんが、今夜の内に幼稚園迄來て下さいませんか、そして幼稚園で泊つて下さい、明日になつて子供に會つて下さいな、お願いですから私がこれから御案内しますから」と一生懸命お願いしましたんですよ、そしてたらねおぢいさんもね暫く考へてね。

「宜しい行つて上げませう」といはれましたの、私はうれしくてくたまりませんでした。

サンタクロスのおぢいさんは、大きな袋を持つて來られていろんな玩具を一つばいづつめ込んでゐられました。私は大よろこびでね、仕度が出來ましたから二人は又其風船玉のやうにフワリくと空を飛ぶのです。何時か知らぬまに

あの學校の運動場の真中にスーと下りました。

「さあおぢいさんこゝが幼稚園ですよ、こつちへ入らつしやい」といつて、それ緑組の入口の左手ねあすこの戸を開けては入りましたの、袋が大きいので中々は入らなかつたのですがね私は袋の後押しをして、エレヤラヤツトは入つたのですよ、そしてお廊下をあるいて、それあそこにお藏があるでせう、あのお藏の内へ御案内しましたの。

「どうぞこゝで明日迄で待つてゐて下さいすみませんが」といつて私は家へ歸つたのです、そしてお目が覺めたらちやんと朝になつてゐました。すぐに起きて幼稚園へ行くお仕度をしました、例より早く來ましたの、そしてねすぐにお藏へ行つて見ましたらね、「チャーン」とサンタクロスのおぢさんはニコ／＼して居らつしやいましたの、うれしいでせう。

「之れから靜かに、この木の番札を一つづゝお取りなさい其のうちにおぢさんを連れて來ますからね」

其の間にサンタクロスの假装が出來上りました。

準備して置いた赤ケツト二枚を、一枚はスカート、一

枚は二つ折りにしてかた掛として筒袖のやうにピンでとめ、赤い帽子をかぶり、白い切紙のおひげ、つけ綿でまゆげや口ひげをつけ大かた顔のわからぬ迄でに綿でひげだらけとした、實によく出來たのであつた、そして大きな袋におもちやをつめ込んで引きすり／＼出る。

子供にはサンタクロスのおぢさんが出られたら皆さんお手を鳴らしてむかへて下さいと注意して置いたのであるのに、サンタクロスの見えても誰一人手をたゞく者はありません、身を引くやうにしてちつと見つめて居るばかり、かたづを呑んで不思議の眼を見はつてゐるのである、しばしそうした、沈黙があつたが、年長組の誰かゞ「あゝ岡本先生やわ」といふ聲がしました。それでやゝ子供の幾分か不審が晴れたらしい動勢が見えたが、まだまじろぎもせず見つめてゐるものが少なくなかつた。サンタクロスは中央に出られて、

「私はサンタクロスです、皆さんが餘り強くなつたので遠いお國からわざ／＼皆さんに上げようと思つておもちやをこんなにたくさんもつて來ました、靜かに番札と合

せて取りに来て下さい」と

云ひましたら、皆さんが

「ヤツバリ岡本先生やつた」とホツとしたやうにどよめいて來ました。

そして順を追ふて袋のおもちやは皆出されてしまひました。

封じた箱の中のおもちやは何であるかは分らぬ丈それ丈子供は中が見たさに、

「何やらか早う見たいな」とためつすがめつしてゐる姿、

「あんたのは小さいな私の大きな箱や」

なんてあつちのすみこつちの角の方で三々五々頭を集めて中をのぞき込むあどけなさ保婦もみな其の境に引き入れられて笑みこぼれてゐた、こうして最終の日はさよならを

げた。

此の園の児供達は常に三圓や五圓位の玩具を與られてゐる幸福な家庭の子女であるが、かうした園の贈物は高の知れた二三十錢のつまらぬ玩具である。それがどれ丈幾倍か子供のよろこびに價するであらうかを思はせられる、其の品が子供の満足をかふに價値ないものであつても、其のあそびの間其の封じたものを開く迄での子供のよろこびに満ちた好奇心それを持ち歸つて家庭に於ける語り草、其印象何れも私共の望ましい事ではあるまいか、かうしたあそびの中に保婦と子供とは心の接近、互の心のよろこびの共通など考へさせられるものではあるまいかと思ひました。

新春のどかな日門に羽根つく音を聞きつゝ記す。

『兼 ち ゃ ん』

東京女子高等師範學校教授

岡 田 美 津

第一豆板

「母ちゃん！ 母ちゃん！」と兼ちゃんはいつた。

田村の一家が立花町の通りをぶら／＼歩き始めてから之で二十三度目だったのだ。

「何だよ、兼ちゃん」と母はすこしうるささうに言った。

「母ちゃん、こゝにお菓子屋があるよ。」

「それがどうしたの。飴チヨコあした上げるからね。」

「いま欲しいんだ。」

「待たなくつちや駄目。お前林檎を二つ食べておまけにお饅頭まで食べておいて飴チヨコが欲しいなんてあんまりぢやないか。」

「あたしまだお腹がへつてる。」

母は之が可笑しかつたと見えて笑ひ出してしまひ、先へ立つて女の兒を抱いて歩いてゐる大きな男に聲をかけて、

「おまいさん。兼公がお腹がへつてるんだとサ。」と言つた。

その男は立ち停つて可笑しさうな眼をして倅に向つて、

「お腹がへつてるのか、兼公？ ポツタラ焼が欲しいんだ

だろ。」

兼公は怒つたやうな顔をした。母は

「そうぢやないヨ。菓子屋を見たらお腹がへつたんだと。

明日の朝でなくつちや飴チヨコはやらないツて今いつたのさ。」

「母ちゃんのいふ事分つたらう。ン、兼公。」と父はいつてこんどは家内に

「オイお芳。来いよ。ちよいと口へ入る甘いもの買つてやらう。」

「ほんとにお前さんはこの子に甘くてしょうがない。」

といひながらそれでも性の良ささうな笑顔をしてお菓子屋の窓の方へ寄つていつて、

「いゝかへ、飴ン棒だよ。氣取つたものを食べさせてお腹

をふくれさせちやならないから。お前さんいゝかい飴ン棒を買つてね、千代ちゃんも一かけ貰はうね、坊や。」と夫の腕に抱かれてゐる女の兒に愛しいとさうに訊いた。千代ちゃん

は母だけに解ることばで嬉しいといふ心持を示した。

「あたゝい豆板が欲しい。と兼ちゃんは父にかすれた聲でい

つた。店の窓に並べてある美味しいものを見て聲が収れる程に情がせまつたのだつた。

母にはきかせない積りだつたのにちやんと聞かれてしまつて、

「豆板だつて！ 豆板なんか食べる子供はあとで油薬を飲まされるんだと母はいひ放つた。

兼公の下唇は突き出て、泣き出しさうに慄へてゐた。夫の吉藏は妻に、

「それや、お前はあと／＼の事を考へてるんだ、がちいさい豆板の一枚ぐらゐ毒になりやしないよ。大丈夫だ。お前だつて少しや食べたいの分つてらア。」

「それやいゝけれどネ、だけど、お前さんお醫者が何といひなすつたへ、ソラお前さんが博覽會へ兼公を連れていつたあとであの子が煩らつたときさ。お前さん忘れやしまひ。兼公は胃が弱いから食べものに氣をつけなくつちやいけないつて。それにこの間の晩新聞でよんだが、南京豆位消化のわるいものはないんだつて、豆板には一杯南京豆が入つてゐるから。」

「そうだな」と夫はさすがに家内の道理ある言葉には勝てなくつて「ぢや、飴ん棒にしよう。千代坊を抱いてくれ。」と言つて菓子屋へ入つていつた。

菓子屋から出ると吉藏は「身體からだに障らぬといふ」飴棒を家内に渡した。家内は早速千代ちやんとと飴ん棒の短かいのを取出して、紙袋を割いてその一方をくるんであてがつた。兼公は沈んだ顔をして黙つて自分の分を貰つた。やがて一行はまた歩き出した。吉藏は千代坊を抱いてゐるのだが、坊やお父つちやんに食べさせるんだとて飴棒のベタ／＼になつた方を時々父の顔に叩きつけた。

およそ五六間も行くとお芳が大きな店の前で一同を立止らせた。

「おまいさん、私ちよいとこへ寄るから。千代坊の着物にする紅い「ネル」を買はうとおもふの。」

「お前のものは何もいらぬのか。」
お芳は飾り窓の中の或る品物をつく／＼と眺めて居たが「すい分高價たかいね。」と呟いた。

「そう高くもあるまい」と吉藏も考へ／＼いつた。

「とにかく地質はいゝんだがね。でも無くてもすむものにそんなにお金を出すのはいやだから。それに兼公に新しい帽子を買つてやらなくちゃならない。」

「あいつの帽子はあれで結構だ。お前そこへ入つていつて欲しいと思つたものを買つて来いよ。帽子の事はあとでまたどうにかならあ。お前だつて人並に正月をしなくちゃ。さ早くいつて来いよ。」

お芳はいそ〜として、

「私千代坊を抱いて行かう。お前さんそう長く抱いて居ちや腕が痛くなつちまふよ。だん〜この子も大きくなるから……ね、そうだね坊や。」

と言ひながら店へ一歩入つてまた一寸あと戻りして、

「おまいさん、兼公をよく見張つて下さいよ。」

「あゝ承知だ！ お前が出てくるまでおら兼公と二人でぶら〜そこらを歩いてゐるよ。」

吉藏は坊やの御愛想の飴のベタ〜を顔から拭き取り、スパー〜と満足らしく煙草を吸つて俵の方へ手を出し、
「さおいで 公。」といつた。

ちやん

兼ちやんはちいさな握り拳こぶしを父の大きな手に入れ、二人で賑を通りをぶらり〜と歩いた。そして往來や店の窓に珍らしきものがある度に立停つた。兼公は返事の出来ないやうな問を數知れずかけた。

質問の途絶えた暇に、父親は、

「おまい、飴ん棒を食べてしまつたのか。」ときいた。

「んたべちやつた……豆板みたやうにうまくないよ、お父つちやん。」

「今豆板が欲しいんぢやあるまい？」

「豆板はうまいね。」と父の顔を見上げながら、用心ぶかくいひ出した。「初ちやんとこのお父つちやんは、時々初ちやんに豆板くれるよ。」

「でもナ兼坊、お父つちやんはおまへに豆板はやらないよ……だがナ、お父つちやんのかくしに手をいれて見な、ひよつとすると……母アちやんにいふんぢやないよいか。」

兼公は狂氣の體で早速手を突込んだかとおもふと、もう口をもぐ〜動かし出した。

「この野郎、袋を破いちまつたナ。」と父はかくしの中を探

りながら「これで明日の朝までもうやらないぞ。お前が南京豆をたべたのがお母さんに知れるとお父つちやんが怒られるからナ。」

「あたい言はないよ。」と兼公は寛大な態度で答へた。

二人はさつきの店の前へ戻ると吉藏は俵の口のはたをよく拭いてやり、しきりに何食はぬ顔をしようとな努めたが、うまくゆかなかつた。

しかし店から出たお芳は嬉しいのと得意なのとで何も勘付かなかつた。

「千代坊をおらにおよこし。」

「いよよ、いよよ、私が少し抱いて行くから。店で腰をかけてゐたから。ちやこの包を頼まう。かくしに入るかも知れない。」

「丁度入る。」と夫はほそ長い紙包を押込みながら、

「氣に入つたのがあつたかい。」

「おまいさん、私や二十錢程値切つてやつたの。」

「なか／＼拔目のない女だナ。さこれから蠟細工の人形を見に行かう。」

「お父つちやん、あたい死んだら蠟細工にしておくれネ。」と兼公が横合から口を出した

「これ、なんです。」とお芳はいつて、

「おまいさん、この子がこんな事いつたら、小言をいはなくちやいけないよ。」

「あゝ、この子は賢いナ……おい兼公、もうそんな事いふんぢやないよ。」と眞面目ぶつて言ひ足した。

兼公はたいして閉口もせず、

「どうして人が蠟細工になんかなるの。」ときゝ出した。

「ひとに見せるためさ。」

「でも、どうして……」

兼公の質問は中止になつてしまつた。汽車にと急いで歩いて來た男の荷物に兼ちやんがいやといふ程突當つてしまつたのだ。

「そらごらん、ちやんと彼方あちちを見て歩かないからサ。」と母はいつた。「おまいさん、兼公の帽子を眞直にしておやりよ……可哀さうにお前痛かつたらう」と優しくつけ足した

「あたい泣かないよ。」と兼公は袖口で眼を拭き／＼慄へ聲

でいつた。

「偉いネ、お前は。」と母親は言つた。

「よし／＼兼坊。ぢきに大人になるからな。」と父親がいつた。

かう慰められて兼公は親達についてトコ／＼歩いていつた。その内に蠟人形の見世物の派手／＼しい入口に來た。

「さ、こんだおれが千代坊を抱かう。」と吉藏がいつた。

「あいよ、入るにはその方が都合がよい。そして私、その包を貰はう、お前さん邪魔になるだらうから。」

といひながらお芳は子供を夫に渡した。そしてそのかくしから包を引出すと、いやはや、豆板の破片やぶがそれに一杯くつ付いて來て、敷石の上に落ちた。

吉藏は抱いてゐるのが赤坊でなくばその場に取落してしまつたかも知れなかつた。兼公は足許の菓子をぢつと眺めて居たが思ひきつて拾ひもしなかつた。お芳は怖い顔をして夫と俣の顔を見てゐた。實際このまゝ蠟人形に作つていゝ程の活人畫だつた。

だが、子供の考いとても大人には想像がつかぬもので……

……兼公は涙を双の目に浮べて怖る怖る母の顔を見上げ、

「お父つちやんは一つも食べやしないよ。」と呟いた。

お芳の顔は驚きの表情に變つた。

「何だつて。」

「お父……お父つちやんは一つも食べやしないよ。」と兼公やんは繰返していつた。

こんどはお芳が急に可笑しさうな顔をして、

「ほんとにお前たちは對の子供さね。」といつて思はず笑ひ出してしまつた。

「おれが悪るかつた！」と吉藏はいつた。

「おまいさん、そつちのかくしへ豆板をいれて置けばよかつたのに……およし／＼兼ちやん拾ふんぢやないの。」

と兼公が屈んでつまみ上げさうにするので制した。

泥がついてやしないよ、母ちやん。」

「でも泥の上だからね、おいで！」

兼公は曳ばられて蠟人形を見にいつた。

父親は俣に眼くばせをして、も一方のかくしをこつそり指して見せた。がそれや何故だろう。(第一の終)

第二 動物園

田村家の親子四人が山下町から白川町の通りへ出て來ると、兼ちさんは、

「お父つちやん、なぜ動物園つていふの。」と言つた。

「さあ、何故だかなア。」と父親は答へて、それから家内に對つて、

「お芳。兼坊がなぜ動物園といふんだとよ。」

お芳は、

「兼公はそいつてきくが、動物園ていはなけれや、ぢや何ていふのさ。」

「ん、それもさうだな。」と吉藏は受けて、

「だが動物なんて妙な言葉だな。考へれば考へる程變だ。

いつだつたかも……」

「お父つちやん。彼處そこもうぢきななの。」と兼公は尋ねた。この子の言語學習的智識欲は盛んでもなく永續性もなかつたと見える。

「あゝ、もうすぐそこだ。お芳、動物を見に千代坊を連れ

てほんとにいゝかね。怖がりやしまいか。」

「怖がる？ そんな氣遣はないよ。この子はめつたに怖がりやしない。水曜日すいようびに牧師様きしやうがうちへ見えた時だつて千代坊はちつとも怖がらなかつた……ねい坊や。牧師様の顔を見て笑つてね、牧師様の眼をおもちやで突つかうとしたり何かしたんだよ。それで牧師様も可笑しがつて、ご自分の咬止め銚劑くわしじょうを一つ坊やに下すつたの。どうしてこの子はめつたに怖がりやしない。」

「おまへがそういふなら確だ。千代坊をおれにおよこし。」
「中へはいるまで私が抱かかいてるよ。もうぢきにひとりで歩おん行いするようになるね坊や。おまいさん兼坊の手を曳ひいて、下さいよ。飛び出していつて馬車ばしやに轢ひかれたり迷子まよこになつたりしさうだから。」

「お父つちやん、動物園が見えて來たよ。」と兼公が云つた。

「あ、あれがそうだ。お前動物を見るの始めてだらうエ、兼坊。」

「見世物で見た事あるよ。」

「さう。原田の叔母おばさんとこに泊つてゐた時だつた。」

叔母さんは動物の居るところへ行くの怖がつたらう。」

「原田の叔母さん大馬鹿だ！」と兼公がいふと、母親はすぐそれを遮つて、

「何です！ 何です！ 原田の叔母さんのことをそんな事いふもんじゃない！ ちゃんとした立派な人なのに……おまいさん兼公の言ふ事を笑つたりしちやいけないよ。兼公がいゝ氣になつて仕様がありません。」

「この子は賢いものな。さこゝで向ふ側へ渡らう。」

「何故ね……」と兼公がまたやり出した。

「兼坊、お父つちやんに手を曳いておもらひ。電車に轢かれると困るからね。」

一同無事に向側へ渡り、親子は動物園へ入つた。二三分の間は入口に立停つて、どつちの方へ行かうかと迷つてゐた。すると掛りの人が大聲で今これから獅子と虎の藝が動物園の健物の西側で始まると觸れて歩いたので吉藏の一まきは群衆と一所になつて、そつちへと急いだ……兼公は、この時ばかりは夢中になつて物もいはずにつゞいていつた。

猛獸を使ふ男が、怖れる氣色もなく立派に獅子や虎を使

ひこなすので見物してゐた田村の一行は感歎の聲を出すだけ

けで話など一向にしなかつた。兼公はその間中父の手を放さうとの氣振りもしなかつた。藝が濟んでしまふとお芳は

「ほんとにまあ！ 感心なもんだね。」と叫んだ。

「まつたく素晴らしいや。」と吉藏はお芳から千代坊を受取りながら言つた。

すると兼公がちいさな聲で父親の傍で、

「お父つちやん、あたひ怖くなかつたよ」とかすれ／＼にいつた。

「おい、兼公は怖くなかつたんだとよ。」と吉藏が家内に傳へる。

「さうかも知れない。」とお芳は答へて「だがね、でつかい獸があつた男のまはりを飛びまはつた時なんか、私やまつたく慄へちまつたよ。あんな獸が檻を破つて出て来て、そこいらの人の頭や脚をもぎ取つたりし出したら、私や千代坊を連れて、どうしようかしらと考へたよ。」

「そんな心配はいらねえこつた。」

兼公は急に氣が強くなつて、

「もし獸があたいの首をもぎ取りさうにしたら、あたひ、あの……………あの……………蹴飛ばしてやらあ。」

「男だものな、偉いや。」と父親がいふと、

「おまいさん、この子にそんな自慢をさせちやいけないよ。」とおが芳咎める。

吉藏はにや／＼しながら、

「兼坊、もし獸が母ちやんを追掛けて來たら、おまい、どうする。」

「あたひ……………あの……………尻尾しつぽを引張つてやる。それから……………あの……………」と剛勇な兼公が言ひ出した。その途端に獅子が吼え立てたので彼は急に口をつぐんで、父親にすがり付いてしまった。

お芳は、

「兼公、お前は自分だけ逃げて、母ちやんを置去りにして獸に食はしちまふだらう。」ときくと、

兼公は下唇を慄はして、

「あたひ、そんな事しないよ。」と眞面目に答へた。

「そうかい、坊や。」とお芳の聲は自然と優しくなつて「さ、

さ、もうこんな話はよさう。お父つちやんと千代ちやんは何を見にゆくんだらう。」

「象だよ。」と兼公がいつた。吉藏と千代ちやんが剝製にした大きな象の前に立つて眺め入つてゐるとこへ、お芳と兼公は追ついたのである。

「これは生きちやわねいんだ。ついでか銃殺する事になつた奴なんだ。」と吉藏が説明した。

「何故銃殺されたの、お父つちやん。」

「險吞だから。」

「なぜ險吞なの。」

「お父つちやんもよく知らねいが、他の話わがにその象が番人を踏みにじつたり、人のかぶつてゐ帽子を食べちやつたりしたんだと。」

「お父つちやん、向ふの白い毛むくぢやらの獸なに？」

「向ふのあれか。お芳、お前知つてゐるか。」

「あの繪を見た事はある。あら、……………あの北極熊つていふんだ。」

「熊か、あれに食はれたら「くま」るナ。全くだ！」と吉

藏は快さうに笑つた。

「全くだ―」と兼公が眞似をする。

「そんな事いふんぢやない。」とお芳がいふ。

「どうして？ 母ちゃん。」

「そんな事いふもんぢやないの。」

「お父つちやんがいふもの。」

「お父つちやんも言つちやいけないの。」

「どうして？ 母ちゃん。」

「さあ、お芳。」と吉藏は今買つて来た目錄を家内に渡して

「これを見ると動物の名が分るぜ。あれあ何ていふもんだ

……向ふの縞のある……あの、斑點（びんてん）のあるあれは？」

「どつちもヒエナだと。」お芳は檻の番號と目錄と照らし合

せて「恐ろしい爪のある大きな黒い奴、あれが印度の黒熊。」

「黒熊か。檻に入れられて居ては「苦勞」熊だな。」と吉藏

は高聲に笑つた。

「まあ。おまいさん、今日は大變洒落がうまいね。……あ

ら、兼公はどこへ行つたらう。」

あちこち探すと兼坊は建物の裏側で、二頭の駱駝に怖る

く見入つてゐたが、

「お父つちやん、ちいさい方の駱駝の顔ね、原田の叔母さんに似てるよ。」と言ひ出した。

父親はアハアハ笑つた。

母親は澁い顔をして、

「おまいさん、私がいつでもいふぢやありませんか、兼公が生（なま）いきな事をいつたときに笑つちやいけないつて。おまへさんにも呆れるよ。」

「だつて。今なんぞ笑はずに居られるもんか。全くだ。おれだつて、おまいの兄さんの内儀（うちぎ）さんによく似てると思つ

たんだから。」

「まあ！」

「ほんとだよ。雨の日曜にあの人が教會から出て來るとき

の顔そつくりだぜ。」

「あゝいふに生れついたんだもの、しかたがありやしなさい」

「おれにあさつぱり解らないよ。お前の兄さんがお前のやうな綺縹（きへん）よしの妹があるくせに、あんな婆（ばあ）の化物を家内に貰ふなんて。」

「フーン、おまいさん今日は、よつほどどうかしてゐる。」とお芳は微笑を無理に抑へていつた。

「お父つちやん、何故、駱駝は象みたやうな鼻がないの。」
「兼坊」と母親は「おまいに遇つちや恵智の神様だつてやりきれない。ちよいとあの背中の瘤をこらん。そして、そうしつこく……」

「お父つちやん、何故駱駝に瘤があるの。」

「お前はおもしろい子だ。瘤があるのは鼻がないせいだろ。……さ、一錢やるから向ふの店へいつて獸にやるパンを買つといで。」

兼公はやがて戻つて来て、

「あたい象に之やるの。」と宣言した。

「それがいゝ〜。そら大きい奴が鼻をつき出してる。……どうだ、パン一個ぐらゐ何の足にもしならない風だな。パンを一つ千代ちやんにやつてもう一疋に食べさせてやつたら。」

「象の鼻は人の鼻と同じなの。」と兼公が尋ねた。

「同じだとも。」

「何故人は鼻でものをつまみ上げないの。エ、お父つちやん。」

「まあ黙つておいで、兼坊。」と母親は制して「おまいさん千代坊を連れて行つて鸚鵡を見せてやつて下さいな。」

いろ〜の鳥をさん〜眺めたり評をしてしまつて気がつくとき兼ちやんの姿がまた見えなくなつてゐた。探しあてるとこんどは彼は大勢の猿にむかつて滑稽な顔をして見てゐた。

「猿なんかオーいやだ、こつちへお出で。私や猿は大嫌ひ。水ん中にゐるあの獸は何だらう。」とお芳は言つた。

「百二十九番つていふ奴だ。」

「あゝ、海豹。獨逸の海で捕つたのだと。これやちいさい方だね。向ふの大きのがカリフルニアのだとさ。兼公あれ海豹だよ。」

「どうして足に毛がないの。」

「あれあ足ぢやないよ。鰭ひよといふもの。」

「どうして鰭に毛がないの。」

「鰭に毛があると泳げないんだらう。」

「どうして毛があると泳げないの。」

「こつちへ来てこの珍らしい獸をごらん兼坊。」と母親はいつた「印刷物には猥ずぼとしてある。」

「どうして獲つていふの。」

「パンを一つかけやつてごらん。」と母はごまかした。「かあさうにね、おまいさん何だかこの獸はべそかいてるようだね。」

「そうだな。おれだつてあんな鼻だつたらべそかくな。兼坊氣を付けて指を噛まれなさんな。」

「どうしてあれの鼻あんなにぐら／＼してるの。エ、お父つちやん。」

「兼坊。あいつお前を見るやうたぜ。もう一つパンがほしいつて鼻をゆすぶつてるんだらう。」

「ちよいと、おまいさん、私千代坊とすこし腰をかけて休むよ。」

「くたびれたらう。茶でも飲まうか。」

「お茶なんか欲しくないよ。」

「欲しくなくつても飲む時もある。さあいで。」

兼 ち や ん

お芳は首を振つて無駄な事だとか何とか呟いてゐた。

「おら……おら今日給料が上がつたんだぜ。」と吉藏が出しぬけに言つた。

「あら、さう？」

「あゝ、五十銭。」

「おまいさんが今日あんまり洒落をいつたりなんかするから、何か譯があるんだと實は思つたけれど。」とお芳も笑つた。

「さ、来いよ、さ、兼坊。」

「お父つちやん、どうして……」

「動物をまたぢきに見に来ようね。お前、パイを食ふか。」

兼公は長い息をして、

「食ふとも！」といつて顔をにこ／＼させる。

(第一の終り)

編輯だより

大正十四年、元旦は美しいもやに無数の未知を包んで訪れてきた。未知の世界、新しい世界、そこには青年の胸にあるような希望の光が充ちてゐる。そして若々しい力が。

我が幼児教育界の北斗である倉橋先生が此の度本會主幹を辭された事は既報の如くであるが吾人は先生がその肩書の如何に依てこの「つかまり起ち」の状態にある幼児教育界の動靜を他事に見らるゝ様な事は斷じて無い事を確心する。更に、更に、吾人は新主幹堀先生を迎へて、より力強く、より明るき新世界の展開を期待してやまない。

全國幼稚園關係者大會も蕨臘岡山の大會を以て四回を數へた、創業の難關を出たばかりである。進展はこれからである、我等はその老少を問はず先輩の指導と相互の協力を以て大いに歩を進めなければならぬ。

新年早々會員諸姉の御寄稿をいただいた事は誠によろこばしい事である。更に各地保育界の御動靜、御報告、又は個人の御感想、研究發表、續々と御寄稿あらんことを。(編輯子)

御注意	廣告料	定價表		冊數	定價	郵稅
		一冊	六冊(前金)			
▽(外國行郵稅は一部十二錢の割にて御拂込下さい)	普通面一頁	金七拾圓	金四圓貳拾錢	金參拾五錢	金貳錢	
▽本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六壹番教文書院宛)	表紙裏付	金七拾圓	金四圓貳拾錢	金參拾五錢	金貳錢	
▽前金切れの節は帶紙に「前金切」と致します。	表紙前付	金七拾圓	金四圓貳拾錢	金參拾五錢	金貳錢	
▽郵券送金の節は割増で一錢切手に願ひます。	表紙裏付	金七拾圓	金四圓貳拾錢	金參拾五錢	金貳錢	
▽本誌の一切は教文書院宛御照會下さい。	普通面一頁	金七拾圓	金四圓貳拾錢	金參拾五錢	金貳錢	

大正十四年 一月十一日納本 第二十五卷第一號
大正十四年 一月十五日發行

無 斷
轉 載

編輯者 東京女子高等師範學校内日本幼稚園協會 堀 七 藏
發行者 東京市下谷區上根岸八十八番地 越 元 新 吉
印刷者 東京市京橋區木挽町二ノ一三 石 上 文 七 郎
印刷所 教文書院印刷部

發行所 教文書院

東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

電話下谷三〇四七番・一九五一番
振替東京四六一一一番

第二十五卷第一號（每月一回十五日發行）

大正十四年一月十五日印刷

定價金二十五錢

院書文教